

第一回 こののはじまり(一)

ここ竹山に暮らし始めてもう五年になる。

三十五年経営してきた事務所を、優秀な後継者に恵まれたことで事業承継をしたのが二〇一七年。それからご隠居を決め込み、今の暮らしがはじまった。仕事の傍ら事務所のホームページを企画編集しているS君から、「石塚さんも、何か書きませんか？ 得意のワークショップのノウハウ集でもいいけれど、せっかくなら竹山での暮らしとか。」と提案された。ご隠居暮らしはよほど暇そうに見えたのか、はたまた、昨今のコロナ禍の影響もあり引きこもりがちになった私の脳みそを案じてくれたのか。

ご隠居暮らしといっても、ここで生活するにはやらなくちゃならないことも多く、結構忙しいのだ。ただ、日頃ぶっきりぼうな物言いをするのは裏腹に、優しい気配りを絶やさないS君からの提案なので、何かの気遣いかと無視するのも気が引けて少し考えてみることにした。

これまでの癖で、構成はどうするか、見出し小見出しをあれこれ考えてみたり。まあ、それくらいなら良いが、久しぶりに原稿用紙に手書きで書いてみようかとか、書くのは万年筆が良いかな、などと考える始める始末。なんだかんだって暇なのか。

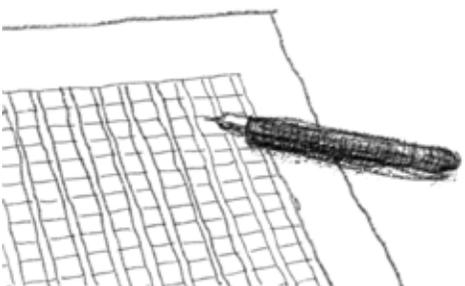
そうこうしているうちにだんだん面倒臭くなってしまった。

そもそも、なにか特別の思いを持つてこの暮らし始めたわけではない。単に偶然が重なってこんなことになっただけなのだ。これが、長年の夢がかなってリタイア後、自然に囲まれた田舎暮らしができるようになったというのであれば、書きようもあるがそうでもない。なんせ、結婚してからこのかた比較的大きなS市の都心から離れたことがなく、ついこの間まで、かなり古くなってしまったマンションを手放して人生最後の買い替えをしようと、まちなかの便利な場所でいろいろ物色していたぐらいだ。はたまた、現代の暮らしや経済のあり方に深い疑問をもち自然との共生や自給自足の生活を目指したわけでもない。それならそれで書くことはたくさんあるのだろうか。

それに、書き出すとどうしても暮らし自慢のような内容になってしまいそうなものも気が乗らないことのひとつだ。他人の自慢話につきあうほどつまらないことはないし、書き方によっては腹がたつこともある。そうならないように意識してもそうならない可能性があるのが、ここ竹山での暮らしなのだ。

まあ、あれこれ考えることはあるのだけれど、この最初に戻ればS君の私への気遣いなので、自分の脳トレと思って書いてみることにした。

書くにあたって筋立ては考えないことにした。思いつくことを流れに任せて書き綴るのなら今日にでも始められる。そのためには短文で区切りがつくのが良い。例えるとその道の方に失礼だが、新聞小説のボリュームで書くのが良さそうな気がした。それがこれになる。結果的に挿絵的なものを添えるという余計な手間が増えてしまったが。さて、どこまで続くものか。とにかく三回で終わるといふことにはしたくないが、果たしてどうなるか。



「石塚さんは今、どんなところに住んでいるんですか？」と聞かれると、常に「千五百坪の土地を手に入れて、森に囲まれた暮らしをしているんです。」と答えている。その「千五百坪」と言う時に、自分の鼻の穴がぷくつと広がってしまふのは、ご隠居としての悟りの境地には程遠いということか。

ところがこの「千五百坪」と「森に囲まれた」というのは実はあやしい。

土地を購入する時に言われたのは「千五百坪」だったが、契約の際に確認した登記簿によれば「千四百九十九坪」で一坪足りない。さらに境界測量の結果をみると「千四百九十八坪」で、どんどん減ってくる。これでは「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と鼻を膨らませるのも憚られ、声も小さくなってしまふ。

この事態を神様がかわいそうに思ってくれたのか、電柱の立て込み工事に来た業者の作業車がぬかるみにタイヤを取られて脱出しようとした際に我が家の境界石を倒してしまうという事件がおきた。業者は早々に境界石の復元をしてくれたのだが、その際の測量結果がなんと「千五百〇一坪」となった。これで堂々と胸をはって鼻も膨らませて「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と言えるようになったという次第。

ちなみに千五百坪とはどんな広さかということで「東京ドームと比べるとどうなんですか？」と聞いて来た人がいた。試しに計算してみたら東京ドームの「〇・一個分」という結果。なんとも中途半端な数字なのだが、まあそんな程度ということ、この数字は使っていない。

もうひとつの「森に囲まれた」というのはもつと怪しい。

いわゆる地域森林計画に位置づけられた森林に面しているのは一面だけで、残りの三面のうち二面は人が住んでいるお隣さんの土地である。いわゆるポツンと一軒家とは程遠い。それでも家の四周は高木が茂り、ほとんど木々の緑しか目に入らない。気分は森に囲まれたとして嘘ではない。ただ、冬になるとほとんどが落葉樹なので木々の間からお隣の家が丸見えになる。それでも家と家の間は六十メートルくらい離れているので森に囲まれた気分はかろうじて維持される。

実は、この土地の購入の決めてとなったことの一つにS市の都心の自宅から車で高速道路を使えば三十五分を着いてしまうという手軽さがあった。いろいろ周りの環境を知るにつけ、スーパーは車で二十分ほどの範囲に大小六件もあり、おまけに同じ範囲に大規模なアウトレットモールもある。我が家に欠かすことのできない品揃えのセンスが良い酒屋も二件ある。歩いて行ける距離には鹿肉専門のレストランや、美味しいハムやソーセージを入手できる店、それに絶品のパン屋もある。さらに言えば国内外に一飛びの空港も三十分ほどで着く。そう、極めて便利なところなのだ。

そんなところで「千五百坪の森に囲まれた(気分になる)暮らし」ができることになろうとは。

きつかけは、隣家の友人のひとこえだった。



第三回 こののはじまり (三)

もう六年以上前だったと思う。そのころ家族ぐるみで親しくさせていただいた妻の友人のお宅に、年に何度かお邪魔させていただいていた。別荘のように使われていたけれど、とても広い庭に色とりどりの草花をセンス良く配し、赤白の葡萄の棚や、栗やプルーンなど実のなる木もたくさんあり、「なんとかの庭」という趣だった。おうちもさすが建築家と思わせる品のある佇まいで、とても心地よい時間を過ごさせていただいていた。冬に訪れる鳥たちを間近に見られるのも驚きだった。

そんなお宅を訪ねたのはちょうどゴールデンウィークの頃だったと思うが、ご主人が突然「隣の土地が売りに出ているみたいだけど、ここは市街化調整区域なので資材置き場か廃車置き場などにされたら困るんだよね。石塚君、買わない？」と。

それが今暮らしている土地なのだが、その時は、どうも話の筋が自分ごととして思えなかった。確かにお隣が資材置き場などになったら、それも地形的に一段低い土地なので見下ろせば丸見えになり困るだろうけど、それで困るのは私ではない。笑ってすまそうとしたが、なんせ暇なゴールデンウィークの時だったので、敷地を探検しようということになった。他人の土地に勝手に入るのだから探検ごっこで済まされることでもないのだが、とにかく背丈ほどある草が鬱蒼と茂っていて人は住んでいないのは明らかかな荒地で、まあ、いいだろうということになってしまった。

入ってすぐのところは笹藪で、大きな木が何本も生えていた。なかには朽ちかけた大きな木もあり探検感はかなりのものであったと記憶している。その先には春先だったのでよもぎがいっぱい生えていたが、同時にガマの姿も増え始め、足元は一步踏み出すとズブつと沈む状態に。要は完全な湿地状態。地面に目をこらすと水たまりがあちこちに見え、油のような虹模様の膜が浮かんでいた。かなり遠くには、屋根が落ちかかった廃屋があるのも見えた。

もし仮に私が買ったとしても、資材置き場か廃車置き場にすくらしいか思いつかないような、そうするにしても大変そうな土地で、ましてや住むなどということはとても考えられなかった。それなのに、お隣に住んでいるご主人の妹夫妻も「住まなくても、いろいろな楽しみ方がきっとできるよ。」と無責任に加勢してくる始末で、まるで原野商法の押し売りにあったようだった。

その後も、そこを訪ねるたびに「買おうよ」「また見に行こうよ」と誘われ続け、ある日「先日、建設業者のような人が見に来ていたので聞いたら、ログハウスの資材を置く場所を探しているって言うていた。いよいよ危ないね。」と。危ないのはこっちなのだが、とりあえず、敷地に立ててあった不動産屋の看板の連絡先に電話を試してみるようになってしまった。

会って話を聞いてみると、広さは千五百坪あり、市街化調整区域の指定前に建った家があるので、今でもその面積の一・五倍までであれば建物をつくることができ、住むこともできるとのこと。



第四回 こののはじまり(四)

その土地には最初の春から、夏、秋と何度か冒険侵入したことになるのだが、その間、話を持ちかけた夫妻が離れとして使っていた小さな建物をゲストハウスとして使わせてくれたのも良かった。あいかわらずひどい湿地なのだが、季節毎に表情をどんどん変えていく姿をじっくり観察することができたのは新鮮であった。いつの間にか訪れるのが楽しみになり、秋には、まだ名前も知らない草花を両手いっぱい摘み取り、大きな花瓶に差している自分に驚いた。

私より冷静な判断ができる妻も、どうも気持ちが傾いて来たようで、土地を見に行くだけでなくS市の植物園のなかにある湿地園と一緒に見に行ったりして、湿原を楽しむシミュレーションをするようになってしまった。

私としてはそのころ、たまたま仕事で伺った小さな村や町で、大変だけれど楽しく誇りを持って暮らしている方々にたくさんお会いすることがあったのも背中を押すことになったのかもしれない。

T村を訪ねた時の話も忘れられない。酒席で副村長から「まちなかの便利なところに移住促進住宅の分譲をはじめたが今一つでどうしたものか。」と投げかけられた。酒の勢いもあって「村の良さに惹かれて住もうとする人は、まちなかの便利などなど求めていないと思う。もつと自然に囲まれた・・・」と決めつけてしまった。そうしたら副村長「それなら石塚さん、二万坪の土地があるけど買わないかい。川も流れているよ。」と返してこられた。「そんなお金は・・・」と尻込みすると、「二万坪、二千万円でどう。」と畳み掛けられた。清水の舞台から飛び降りるつもりで有り金叩けばまったく手が出ない額ではないのにびびくりした。もちろん買いはしなかったが。

隣人の隣人、つまり話を持って来たご主人の妹夫婦だが、その存在も大きかった。何度か会ううちにとても人柄の良いお二人で気に入っていたのだが、ある時、ご主人が「川で鮎を釣って来たので、一緒に食べませんか。」と声をかけてくれた。鮎は香魚とも書くが、天然の鮎はひと噛みすると香りが口から鼻へといっぱいに広がり、思わずため息が出る美味しさだった。妻と「この土地を手に入れると、毎年、鮎を食べることができのかな。」と頷きあったのが思い出される。

価格交渉をしたら一千万円を切るまでになったが、決して安い買い物ではない。それも野遊びのために。

だが、ほどなく購入することを決めてしまった。今から思えば、なぜ、こんな荒地を買うなどという決断をしたのか不思議である。が、そういうことになってしまったのだ。いろいろ決断の理由をあげてみたが、どれも決定打と言えるものはない。将来の暮らしを冷静に比較検討した結果とか理詰めの判断ではなかったのは確実だ。きつと、私たちの心をぐつと捉えて離さない何かがあったのだらう。

この決断が重要な意味を持っていたことを気づくのはもう少し先になるのだが、その話はのちほど。

